

続々々

# 人間の道

—命への開眼—

松下昌義

みちしるべ文庫二八

## はじめに

この一冊は、ヨハネ福音書から言葉を引き出し、それをタイトルのようにして以下記してありますが、それは、その言葉を注解したり、講解を意図したものではありません。

ヨハネ福音書は、他の福音書同様に、それなりの内容に特色があつて、聖書学的に研究の対象となるものであります。しかし、そのような作業は、わたしの及ぶところではありません。

ここにある文章は、ヨハネ福音書にある言葉と素直に向い合つて、その言葉が示すいのちの根源に開眼させられたいと願いつつ、わたしの日々の求道の生活の場で感じ、受けたことを、そのまま、日曜礼拝に出す教会週報（一九八二年六月～一九八三年八月）に記したものです。

それにしても、聖書を読むということは、聖書が語っていることを聞くことだと思いません。聞くとは、その言葉を生み出したところを受けるところであつて、決して、こちら側の思いで勝手に聞くことではありません。

このことは、聖書を読む場合だけのことでなく、およそ人と人とが言葉や文字で関わるかわりに於て、相互に心得ておかなければならない、とても大切なことであります。もし、人が相互に自分勝手な思いで相手の言葉や文字を理解して受けとるならば、その関係は忽ち破壊さ

れてしまいます。

人が、何かを語るとき、必ずその人の体験があり、その体験が言葉を生むのではないでしょうか。言葉には、その人の体験が充満しているのです。しかしそこで語られている言葉は、その体験の一部分なのであります。従って、言葉を聞く人は、その一部分としての言葉から、言葉にならない言葉をも深く広く聞きとり、受けることが、とても大切なのであります。つまり、よく聞き、よく受けること、これが、本当の聞くということなのではないでしょうか。このような聞く態度は、ほかでもなく愛だと言えましょう。

聖書も体験の言葉です。その言葉には、それを語った人が信仰に於て見たこと、感じたこと、知ったこと、受けたことなどが充満しています。つまり、聖書の言葉は、内容が一ぱいつまっていますとても重い言葉なのです。その言葉を、わたしたちはよく聞き、よく受けるとき、はじめて聖書を読んだと言えるのです。ですから、わたしたちは、自分勝手な考えで、重い言葉を、言葉つら、文字つらだけで軽がるしく聞いたり、論じたりしてはなりません。

では、聖書の言葉が深いところで語り示していることは何なのでしょう。それは「いのち」であります。

「これを書いたのは、あなたがたがイエスはキリストが神の子と信ずるためであり、

信ずる者がみ名によつていのちを受けるためである。」

ここでヨハネが言う「いのち」とは何でしょうか。それは、すべてのものをそれとして生かす根源的な力だと言えます。死も生もその手中にあって保つ「力」であり「愛」です。それは増しもせず減りもせず。はじめもなく終りもない全宇宙の根源的な力と愛です。即ち、神の支配そのもの、永遠のいのちなのであります。このように言いますと、全くつかみどころがないように思われるでしょうが、実は、自分にとって自分が最も身近であるように、わたしたちの永遠の未来に至るまで、いつも、わたしたちを、わたしたちたらしめている「いのち」なのです。

「はじめに言があった。言は神と共にあった。……すべてのものは、これによってです。……この言に命があった。そしてこの命は人の光りであった。光はやみの中に輝いている。そして、やみはこれに勝たなかった」  
(ヨハネ福音書 1章)

イエス様は、このいのちを、いのちとして生きることにより、いのちをお示しになったのです。この一冊が、右のような「いのち」が、すべての人々の足下に光り輝いていることに、人々をして開眼せしめる一助になればと願っています。

一九八五年七月一日

「初めに言コトがあった。言コトは神と共にあった。

言コトは神であった。」

(ヨハネ福音書 1章1節)

ヨハネは、ユダヤ人以外のギリシヤ人やギリシヤ人のような考え方をする人々にも、イエスさまのすばらしさを知ってほしいと思いました。そこで、どのように語れば、最も正しくイエスさまがキリストであるということを彼らに伝えることが出来るかと、苦心したすえに考えた言葉が『キリストとは言コトである』ということであり、言コトの具体的な現れがイエスさまなのです(1・11)ということであったのです。

でも、今日のわたしたちに「ロゴスとは言ことば」であるといわれても、今一つピンときません。では一体、ロゴスとは何なのか、ということですが、これはとてもむづかしい問題です。でも、あえて理解しやすいために申しますならば、ロゴスとは道理であるといえます。

ギリシヤに於てロゴスという言葉の内容の発見者として有名な人は、ヘラクレイトスという哲学者ですが、彼はロゴスを理法と言い、理法とは「いつもそのとおりにあるそれ」であると申していますが、わたしはそれを「道理」と言っています。

「人と人とが仲良く在る」ことは人間の在り方の道理ロギクスなのです。ですから「わたしたちが、

互いに、愛し合うなら、神はわたしたちのうちにいます」(ヨハネ第一の手紙4・12)ということになるのです。

ものごとの道理とは、はじめからそのとおりにあるのです。道理は永遠であります。また、どこに於てもそのとおりに在りますから、道理は普遍なのです。正に道理は、この宇宙に満ちて居るのです。そして、満々たる道理を、そのまま身をもって現成して生きて下さったのが、イエスさまなのであります。

2

「あなたがたの知らない方が、

あなたがたの中に立つておられる」。

(ヨハネ福音書 1章26節)

イエスさまの紹介者としてヨハネが人々の前に現れます。彼はただ、ひたすらにイエスさまの偉大さと尊さを人々に語りつづけ、一言も自分を語りませんでした。ここにヨハネの偉大があります。彼は自分の分をよく弁えてそれを越えなかつたのです。

ヨハネがイエスさまを人々に紹介する言葉は、ここをおちつけて聞かなければ、少しむづかしいように思われます。

「私の後に来る方は、私より優れた方である。私よりも先におられたからである」(1・15

「あなたがたの知らない方が、あなたがたの中に立っておられる」(1・27)

ヨハネはイエス様のことを「私より先におられた」方だと申します。「先に」とは年令のことではありません。年令ならば、おそらくヨハネが年上であったと思われる。「先に」とは「ずーと以前より」ということであり、さらに、もっと正確に言うならば、この世界、この宇宙がはじまる以前よりということなのであります。

さらに、そのイエス様は、「あなたの中に立っておられる」のであります。

どうやらヨハネは道理としてのイエス様を語っているようです。イエス様とは、すべての存在の道理の具現者として道理を生きられた方なのです。

「わたしを見た者は神を見たのである。」(ヨハネ12・45。14・9) イエスさまを見るととき無条件に「なるほど」と思います。この「なるほど」が道理です。全宇宙はこの道理で、みちみちています。道理の中の道理の一つが愛だと申せます。正に神は愛でありその愛がイエスさまであり、万物に愛が満ち満ちているのです。

それが、はじめからあり今あり、いつまでもある真実であります。

「きてごらん下さい。そうしたらわかるだろう。」

(ヨハネ福音書 1章39節)

イエス様は、「来りて見よ」と申されます。「そうすれば、わかる」と言われます。

イエス様について語りかされたナタエルという人は、「ナザレ村から、何のよいものでよいか。」と言った。それに答えてピリポという人は、「きて見なさい」と言いました。

私たちは、言葉や文字で学び聞いた事柄に、すぐ執<sup>とら</sup>わてしまいます。つまり、言葉や文字で表わされたものは真実であり、実在だと思ひ込んでいます。そもそも、そこが大問題なのです。

例えば「聞くと見るとでは大違い」ということがあります。言葉や文字は、ときとして、事実を事実として語らず、事実を言葉や文字の世界でつくりあげ、その結果、全く誤って事実でないものを、あたかも事実であるかのように示し、思ひ込ませる、ということを見せています。つまり、観念の世界でつくりあげた誤った事実を事実とする作業を言葉や文字は平気です。観念的のものを見たり、考えたりしてしまう、ということは、わたしたちが日常何の疑いもなくしてしまうことなのです。



事実より言葉が先にある。だから事実が事実として見えない。否、見ても見えず、ましてや聞いても本当に聞こえない、ということがおこってくるのです。

先に記したナタナエルという人は観念でイエスを見たのです。しかし、ピリポは事実を事実として見たとき、イエスがそのままキリスト（道理・愛・真実）を生きている人であると見えたのです。ですから、ナタナエルに、観念で見えることを捨てて、事実を事実として見なさいとすすめたのです。私たちは事実を事実として見ているでしょうか。

4

「。婦人よ、あなたは、わたしと、なんの係わりがありませんか。わたしの時は、まだきていません。母は僕たちに言った。このかたが、あなたがたに言いつけることは、なんでもして下さい。」

（ヨハネ福音書 2章4・5節）

水がぶどう酒に変わった。という現象にとらわれていては、ここで聖書が証示しようとする大切な一事に開眼することはできません。

今、道元のことばの一つを思い出す。「心をもってはかってみたり、あるいは言葉をもって言ってみるのでなく、ただ、わが身も、わが心もすっかり忘れて、すべてを神（真実）の中に

投げ込んでしまい神（真実）の方から働きかけていただいて、そのまま随したがってゆくとき、はじめて、力もいれず、心をも、もちいることなくして、それがなるのである（正法眼蔵生死の巻 意訳）

イエス様は申されます。「わたしの時は、まだきていません」と。「わたしの時」とは「神の時」という意味です。世のいかなるものも、この「神の時」に対して指一本たりともふれることは出来ません。この「神の時」は、人の思いを越えて恵みとしてすべてを包み、すべての只中に充滿しているのです。わたしたちが「神の時」になし得ることは、この身のままで、「神の時」の中にゆだねることのみであります。その時、わたしの中に「神の時」が現成してくるのであります。

イエスさまの母は言った。「このかたが、あなたがたに言いつけることは、なんでもして下さい」と。母は、イエスさまの「神の時」の中へ自分も他人も投げ込んでしまった。その時、「神の時」が、水をぶどう酒と化して現成したのです。ぶどう酒とは「神の時」であり、恵みであり、愛であり、神そのものであります。「神の時」は、今、わたしたちの足下に充滿してある。目ある者は、とくと見て、己れを「神の時」の中へ投げ込んでみるのが大切です。

「イエスは彼らに答えて言われた。

この神殿をこわしたら、わたしは三日

のうちにそれを起こすであらう。」

(ヨハネ福音書 2章19節)

イエスさま当時のユダヤ教は、正まさに神殿宗教でありました。

「ヘロデ神殿を見ないで、美しいものを見たとは言えない」といわれるほど、その神殿は立派な建物でありました。紀元前十七年に着工され、イエスさま当時で、すでに四十六年という年月がついやされて、完成したのが六十四年といえますから、実に八十四年の月日をかけただけです。

当時のユダヤ教徒にとっては、神殿は「天の門」であり「神殿いゝし給う処」でありました。支配者・権力者にとっては、権力の中心であり、金のなる木でもあったのです。

この世の宗教は、少し大きくなると必ず「本山」と呼ばれるものを作ります。そして、そこに神あり、仏ありと申します。

そこに神あり、仏ありでありますから、その健物は必ず馬鹿でかく、何よりも立派でなくてはなりません。信者は本山参りをし、あれこれと多くの金品を神の名・ご利益の約束によって

「ありがたく」しぼりとられ、まきあげられて幸福一ぱいで帰って来る、というしくみになつてゐるのです。このようにして大きくなっていく宗教は、その金力により政治的権力者と手を結び、この世で権力を拡大してゆき、神の名によって自己をえらそうにうそぶくに至るのです。イエスさまは、このような神殿宗教がもつ欺瞞性を、そのするどい霊的な眼力で見透していられます。この世のいかなる荘嚴な建物も、儀式も、言葉も、人も、イエスさまの眼中には無い。眞実は、それ自体には一毛たりとも無い。

イエスさまを眞に知る者は、この眼力を、確実に得ている者であり、この知恵の上に生きてゐる者です。はたしてわれわれにその眼力あるやいなや、深く反省してみることはとても大切なことであります。

6

「しかし、イエスご自身は、彼らに自分をお任せにならなかつた。それは、すべての人を知っておられ、また人についてあかしをする者を、必要とされなかつたからである。それは、ご自身の心の中にあることを知っておられたからである。」

(ヨハネ福音書 2章24・25節)

イエス様は、すべての人々を招き、すべての人々に同情し、いかなる人をも愛されず。しかし、すべての人々、あらゆる事柄に対してご自身は毅然（きぜん）としていられる。

世の人々は、イエス様についてそれぞれ自分勝手なことをもつともらしく語る。

だが、どれもこれも、しょせんは人の思いから生れ出て来たものである以上、たとえそれがどれほど学的であっても、またどれほど熱情がこめられていても、およそイエス様の思いとは、全く関係のないただの人の思いの一つにしかすぎない。もちろん、教会であろうと、牧師であろうと、法王であろうと、神学者であろうと、さらには聖書の言葉であろうと、その例外ではあり得ない。「しかし、イエスご自身は、人々に自分をお任せにならなかった」とある。なぜか、それは、「まかせ」られたとたんに人々は、自分勝手なことをまことしやかに、ものみごとに語りだすからである。今日自分も含めて、世の多くの教会や人々を見るとときその感はいよいよ深くします。

だから、私たちは只々黙すしかないのです。

黙すとは、捨てるということ。手を切り捨て、足を切り捨て、目を、舌を、脳を……、さらに心を捨てるのであります。正に「身心脱落脱落身心」であります。

そのとき、神の愛や、神の支配、さらに神の思いなどが、己れの眼前におのずと現成し、ついに生と死を超えた世界が現実となる。その現実立って今日を見、明日を見て生きていく。

ここにキリスト者の現実があり、さらに人間の面目がある。耳あるものは聞くべしであります。

7

「よくよくあなたがたに言っておく。だれでも新しく

生れなければ、神の国を見ることはできない」

(ヨハネ福音書 3章3節)

神の国とは、神の恵みが働いている現実の事実そのもののことであります。

わたしたちが、その働きの現実の事実について知っていようが、知っていまいが、はたまた、それを認めようが認めないでいようが、それらには一切関係なく、わたしたちの足下・脚下に厳然として働いている事実が神の国なのです。

この事実は、わたしたちの知性や感性、さらにはたんなる宗教心で——つまり肉によって——とらえられるものではない。なぜならそれは知性・感性・宗教心などをはるかに超えた事実であるからです。

われわれは、人の知性や感性を信じて少しも疑うことをしない。疑うことは愚か者とさえ考えている。

しかし、これほど不誠実・高慢はない。この不誠実・高慢が人の人たる面目をつぶしている。

神の国は、わが脚下・足下にある。それは、不増不減としてこの世のいずれの存在より事実として働いているのであります。しかるに、その事実が事実として見えないのは、ただ、己が知性信仰・己が感性信仰、己が宗教心信仰のわざわざいによるからです。

「わたしが無となればなるだけそこを神がきて満たす」と言った人がいますが、自分を貧しくする者こそ神の働きの現実の事実(神の国・神の支配)を見るのであります。(マタイ5・3)

先ず、神の働きの現実の事実がある。その事実の影としてわが目、耳……で見る現実がある。この順序は絶対に逆ではない。それ故に、イエス様は、この事実としての順序を事実のとおり生き語り、教え示される。正に「新しく生れる」とは、この事実になつた当り前の生き方のことであり、それをイエスさまは提示されたのであります。

8

「神が御子を世につかわされたのは、世をさばくためではなく、御子によって、この世が救われるためである。

彼を信じる者は、さばかれない。」

(ヨハネ福音書 3章17・18節)

救われるとは、そのものがあるべきところにあり、立つべきところに立ち、覚むべきことに

覚め、見るべきものを見る、というところにおのずと成るものであります。

では、あるべきところ、立つべきところ、覚むべきこと、見るべきものとは何か。

それはほかでもない。「光はやみの中に輝いている」(ヨハネ1・5)といわれる「すべての人を照すまことの光」(ヨハネ1・9)そのものであります。

この全宇宙にあるすべてのものが、好むと好まざるにかかわらず、すでに受けている恵みの光り、愛の光りがある。その光りによってのみ、そのものがそのものであることが出来る光りがある。山が山であり、川が川であり、はたまた、わたしがわたしであり得るのは、ただに、この恵みの光り、愛の光りのお蔭げなのであります。

この恵みの光り、愛の光りを「神の支配」「言」<sup>ロゴス</sup>さらに「キリスト」と聖書はいいあらわしています。

そして、イエス様とはこの光りそのものとして生きたお方であります。それゆえに、一言は「肉体となった」(ヨハネ1・14)とあるのです。つまり、イエスはキリストを生きたのであって、イエス様に於てキリストを見る者はすべての人を照すまことの光を脚下・足下に見るので「彼を信する者はさはかれない」(3・18)のであります。

しかし、この世はそれを知らず、受け入れず、己れが自分自身に於て立ち働いているかのように思い込んでいる。(ヨハネ1・10)そのような生は根なし草のようであり、油なしのとお



しみの火の光りであり、遅かれ早かれ消滅していく。さばきとは正に、この消滅していく状態そのものであります。

今、人々が、この全ての根基であるまことの光りに開眼せずして政治・経済・哲学・芸術……を論じたとしてそれらはしょせんは徒花あだばなにしかすぎないのであります。

9

「人は、天から与えられなければ、何ものも受けとることは

できない。」

(ヨハネ福音書 3章27節)

「だれが思いわずらったからとて、自分の寿命をわずかでも延ばすことができようか」と、イエス様は申されます。

わたしたちはついぞ大変な思いちがいをする。それは、自己が立つも倒れるもすべて自己によると思ひ込んでいる。

しかし、立つも倒れるもそれは神による(ロマ14・4)のであります。

己れの思いわずらいが己れの生きる最も深い根底に於て、何ほどの影響を与え得るであろうか!! それは全く無し、であります。パウロは言う。

「神の慈愛と峻厳とを見よ。神の峻厳は倒れたものたちに向けられ、神の慈愛は慈愛にとどまるものに向けられる」(ロマ11・22)と。

されば、われらの神の前に於て為し得ることは何か。事実、何も無い。否、為し得ることが只一つある。それは、しかり、しかり、否、否、のみであります。

われらが為し得る只一つは神の、しかり、を、しかり、とし、神の、否、を、否、とするのみ。「それ以上に出ることは、悪から来るのである」(マタイ5・37)

神の、しかり、は、われらが眼前に実在している。目をしっかりと開けて見るならば、ハッキリと見ることが得る。山を見よ!! 川を見よ!! 空を見よ!!。空の鳥を見るがよい、野の草花を見るがよい、とイエス様は申されます。

しかし、盲目なる人間はそれを見ない。否、見ることが出来ない。神の、しかり、を、否、とゆがめ、神の、否、を、しかり、に変えて休むことがない。

哲学と称し、宗教と称し、はたまた、政治に於て、経済に於て、科学に於て……、神の、しかり、神の、否、をゆがめることに余念がなく、それを誇って止むことがない。先ず、神の、しかり、神の、否、の世界を、しっかりと見ることが、すべての要かなめであります。それ故に、「願い求める」(エペソ6・18/ピリピ4・6と)求道こそが大切であります。

「上から来る者は、全てのものの上にある。

地から来るものは、地に属する者であって、地のことを語る。

天から来る者は、全てのものの上にある。

彼はその見たところをあかしているが、

だれもそのあかしを受け入れない。」

(ヨハネ福音書 3章31・32節)

天は天であり、地は地であります。神は神であり、人は人であります。肉は肉であり、霊は霊であります。

地はやがてくずれ去り、人は消えゆき、肉は朽ち果ててゆきます。

しかし、天はくずれず、霊は遍在し、神は永遠であります。

だが、天が地を包み、神が人を抱きかかえ、肉に霊が充満するとき、地は光りかがやき、人は喜び、肉は平安を得るのです。

事実、地が地となり、人が人となり、肉が肉となってその本来の面目をあらわすのは、地が天に包まれ、人が神に抱きかかえられ、肉が霊に充つるときであります。

わたしたちは決して安易わんいに天と地を混同してはならない。

わたしたちは決して安易に神と人とを混同してはならない。

わたしたちは決して安易に霊と肉とを混同してはならない。

己が知性に於て、感性に於て、はたまた宗教心に於てさえも決して混同してはならない。

「肉を頼みとせず」(ピリピ 3・3) とパウロは申します。さらにパウロは申します。「わたしは今後、だれも肉によつて知るまい」と。(コリント第二・5・16)

肉に従う者は肉のこのみ思う。(ロマ 8・5) 地につくものは地のこのみ思う。人につくものは人のこのみ思うのであります。

肉から離れよ、地から離れよ、人たることを止めよ、というのではない。

肉にあつて歩いていても、決して肉に従つてことを為すな!! (コリント第二・10・3) というのです。

## 11

「わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことがないばかりか、わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるのである。」

(ヨハネ福音書 4章14節)

「かわいている者には、いのちの水の泉から価なしに飲ませよう」（黙示録21・6）

イエス様が申される「水」とは、「いのちを豊かにうるおす水」であります。

いのちの水とは、端的に言えば、人をして真に人たらしめる水であります。また、己れを真実己れたらしめる水であります。

人が人のものであって、その実、人が人でない。己れが己れのものであってその実、己れが己れでない。ということに人も、己れも全く気付いていない。否、気付くことが出来ないし、気付こうとしない。それは、ただ、己れの肉のかわきをのみうるおす「肉の水」をもって満足しているからであります。

今の世の中を見るとき、肉の水で充満している。そして人々は、「渴して塩水を飲む」ごとく、その肉の慾は止まることを知らず、ますます不満と不安をつのらせ、さらに肉の欲を求むること、肉の水を求むることが進歩であり、幸福を得る道だと信じて止まない。

しかし、肉はしよせん肉であります。肉の水は、みせかけの幸福、みせかけの進歩であってその実それは、人を惑わす「魔」以外の何ものでもない。

「いのちの水」は、人を生かしている水であります。人の生の最も深い根底にあって人の人たる、ものものたる存在を生み、育て、支え、導き、完成せしめる、燃えたぎる「いのち」そのものであります。

肉のいのち、肉の水もこのいのちの水、いのちのいのちなる内にある一つのものにしかすぎない。

イエス様は、肉の水の洪水の只中にあるわたくし共に、生の根源的支えとしての、いのちの水をさし出していられるのであります。

12

「彼は自分に言われたイエスの言葉を信じて

帰って行った。」

(ヨハネ福音書 4章50節)

ヘロデの宮廷の高級官僚(パシリコス)が、四十キロもの遠方よりイエス様を訪ね、彼がもって来た問題に対して何の保障もないと思われる、ただの言葉、だけをもって、空手、で帰って行ったという、このヨハネ福音書の記事は一体わたしたちに何を語り示しているのでしょうか。

空手帰還、については、かつて中国に求道して日本に帰って来た道元が、その問いに答えて言ったという「わたしは空手で帰ってきた」という言葉を思い出す。

道元が空手はその実、万巻の經典を持ち帰るよりも、はるかに多くの經の真隨を持ち帰って

来たということを示す言葉であることは言うまでもない。

わたしたちは、目に見え、手でふれ、耳に聴こえるそれらをもって確かなこととする。

しかし、それらはその実それ自身に於て確かなものなど何一つないのであります。それらは、それらの今一つ奥にある事実の現れとしてのみ、有効なのであるということを、世の人々はついで知らない。

例えば、宗教・信仰に於て經典の言葉を、それ自身いかほど読み終え、字句について分析研究をしたとて、その經典の言葉のよつて生じてきたところの文字・言語を超えた事実を見ぬままであるならば、その經典は彼にとつては空しいと言えます。文字を読んでその心を読まず、言葉を聞いて心を未だ聞かずは、文字は文字に非ず、言葉は言葉にあらざと申せます。

かの高官は「空手」で帰って行ったが、その実、耳にした言葉を語った当のイエスそのものに確実なる生命の躍動・不増不減なる光り輝く生命の現れを見、その現れの一点としてのイエスの言葉を確かに聞き受け取ったのであります。

正に彼の「空手帰還」は、その実その内に充滿させる喜び・平安・勇氣・希望・愛・恵みをもつての帰還であつたのです。

「イエスは、その人が横になっているのを見、また長い間わずらっていたのを知って、

その人に『なおりたいのか』と言われた。』

(ヨハネ福音書 5章6節)

「このころの貧しい人は、さいわいである。天国は彼らのものである」とイエスは申されました。これらのことは、ころを貧しくすること、また求めることの大切さを示されたものです。自分は、これでいいのだ!!と慢心している者、自分の日々の生に何も深く関心を持たざる者、さらに、しかたがないとあきらめている者、目先の利害得失に関心をうばわれている者などには、求道心はおこり得ない。

求道心をもたぬ者は、全てのことに関心となってしまう。ただ己れが欲の命ずるままに生きることになる。肉の欲、物の欲、地位名譽の欲、金の欲、精神の欲…… 欲に引かれてさまよい歩く。たとえそれらが、どのように美しく語られようと決して求道心ではない。人が求道心にかりたたされるのは、一つの真実に開眼させられたときであります。

「真実究明」これこそ求道心へ人をして追い立てるのであります。

未だ己れにとって真実は明らかではない。しかし、真実を予知している故に、それを求める



心を強くする。己れにこの求道心がないと、やたら「名利に人師を求める」ことになる。宗教家・神学者、信仰人にこの類の輩の何と多いことか。イエス様は申されます。

「なおりたいか」と。

これこそ求道への導きの言葉であり、恵の手であります。

「はい」と答える時、人の心に求道心が本当に現成するのであります。その時もはや結果など問わない。求めずにはいられない。眠ても覚めても、仕事をしても遊んでいても、歩いていても走っていても、笑っていても泣いていても疑っていても、求めているのであります。

14

「私の父は今にいたるまで働いておられる。

私も働くのである。』

(ヨハネ福音書 5章17節)

事実より言葉が先にあり、事実が事実とされないで、事実が言葉によってとらえられ、ゆがめられ、ゆがめられたことがあたかも事実であるかのようにされてしまう、という世にも不思議なことがこの世の中で大手をふって歩いている。まことに馬鹿げたことであるが、世の人々

はついで、その馬鹿らしさに一向に目覚めることができない。

ときとして、クリスチャンと呼ばれる人々も、この例外ではない。

先づ、聖書の言葉が先行する。目の前にある事実がどうであれ、一向におかまいなしに、目の前の事実を聖書の言葉でとらえ、ゆがめかねない。それが証拠に、ことあるごとに、「聖書は」「聖書は」と一つ覚えのごとくにくり返す。「御言には……」「御言には……」と御言を唯一絶対としてかつぎ歩く。そのさまは滑稽の一言につきる。

彼らは、聖書の言葉が、正に事実を事実として言葉し、語っているからこそ聖書が正に聖書なのであるということを知らない。

「聖書も神の力を知らない」と申されるのはイエス様である。(マタイ22・29、マルコ12・24)

先ず、事実を確実に見ないで、いくら聖書を調べたとて何の役にも立たない。(ヨハネ5・39)

では、事実とは何か。それはほかでもない。神の働きそのものである。神の働きとは何か。それはほかでもない。日が東から出、西に入ることであり、花が咲き、花が散り、鳥が飛び、鳥が落ちることであり、人が息をし、泣き笑い、喜び、悲しみ、怒っているそのことである。

なぜ人は素直にものを見ないのか。悪だ、罪だ、裁きだ、天国だ、地獄だ……名譽だ、出世だ……道徳だ……と執とらわれてしまうのか。

すべてがそこから出てそこへ帰ってゆく生命の根源、昨日も今日も変ることなく、時を定め  
て生ぜしめ滅せしめる働きポエマそのものに目覚めようではないか。

15

「聖書の中に永遠の命があると想って調べているが、  
この聖書は、わたしたちについてあかしをするもの  
である。しかも、あなたがたは、命を得るためにわ  
たしのもとにこようとしなさい。」

(ヨハネ福音書 5章39・40節)

イエス様が、「わたし」と申される時、その「わたし」とは一体全体いかなる「わたし」  
を「わたし」と言っておられるのか。と言うことを明確につかんでいないと、とんでもない思  
いちがいをしてしまうものです。

イエス様が申される「わたし」には、次の二通りの「わたし」があります。

一つには、肉としてのイエスなる「わたし」です。目があり、口があり、……手があり、足  
があつて見たり、聞いたり、食べたり、排泄したり……する日常の生を生活する「わたし」で  
す。これをイエス様と言うなら、「イエスなるわたし」です。

今一つの「わたし」とは肉なるイエスを超えて在る「わたし」、肉なる「わたし」を「わた

し」たらしめている「わたし」。この「わたし」は生まれもせず、死にもせず、増しもせず、減じもせず、「今いまし、昔いまし、アルバであり、オメガである」（黙示録 1・8）「わたし」であります。この「わたし」を先のイエスとしての「わたし」に対して「キリストとしてのわたし」と言うことができます。

以上の二通りの「わたし」を混同してしまうと、イエス様の申されることがわからなくなります。

例えば、「わたしが命のパンである」（ヨハネ 6・35）「わたしは真理であり、命である」（ヨハネ 11・25、14・6）「聖書は、わたしについてあかしをしている」というのも、「キリストとしてのわたし」です。にもかかわらず、「イエスとしてのわたし」と理解するならば、聖書（この場合は旧約聖書）そのものがイエスについて記されてあるということになって、肉の目に見えるイエスに、聖書のすべてが、とらわれてしまうことになるのです。しかし、聖書は、命そのものについて解き明かしている、正に命の書なのであります。

「イエスは人々が来て、自分をとらえて王にしようとしていることを知って、ただひとり、また山に退かれた。」

(ヨハネ福音書 6章15節)

なぜイエス様は、人々が王にしようとすることを拒まれたのでしょうか。

結論を先に言うならば、イエスさまは「王」などというものは、人々が共同してもつ幻想にしかすぎない、ということをし、よく知っておられたからです。

ユダヤ人たちには、自分たちの過去から持ちつづけて来た救い主に対する待望心があり、その待望心がイエス様の力強さに接して、一時的にせよ現実化へすり変ったと申せます。

「もしかしたらこの人ではないか？」

「そうだ、この人だ!!」

「絶対にこの人にちがいない!!」

個人の幻想が共同の幻想となり、共同の幻想が個人の幻想となり、それらの幻想が現実とされ、確信されるに至る。そしてその幻想にふりまわされる。

イエス様は、人々の幻想の対象とされることを拒まれたのです。

もともと王などと呼ばれる者は、人々の共同幻想以外の何ものでもないのであります。

イエス様を王にしようとした人々は、その後「イエスを十字架につける!!」と呼ぶ人々に一変するのです。

それは、自分たちが選んで出した大統領を、少し自分たちに不都合になれば支持しなくなってしまうのと同じようなものです。

選挙に出て大統領になろうとする者も、大統領を選び出そうとする者も、共に幻想にとりつかれ、幻想に生きているということを自から全く知らない。愚かとは正にこのことであり、馬鹿者とはこの者のことであります。

イエス様は「山に退かれた」とある。山には幻想をつきぬけ人間存在の根底、生命の根源がある。そこに立って、この世を見ないとついで、幻想を幻想して生きてしまうことになる。

17

「イエスが海の上を歩いて舟に近づいてこられるのを見て、

彼らは恐れた。」

(ヨハネ福音書 6章19節)

もともと、イエス様は海の上など歩いてはおられない。

ヨハネ福音書は「海辺」と記している。

だのに、だれが、イエス様をして海の上を歩かせたのか。

人びとのイエス様に対する願望が「海の上を歩く」イエス様の偶像をつくりあげたのだろうか。もし、そうであれば、人間は自分でつくりあげた像で自分を慰めるといふ愚かさをなす者となる。正に、これこそ、幻想に生きる者であります。

幻想は眞実人を救わない。幻想は正に幻想に終わるほかない。

人がイエスを幻想して生きること信仰と言うなら、信仰は空虚の一言につきる。聖書も無内容の一言につきる。

では、誰がイエス様を海の上に歩ませたのか。

ほかでもない。イエス様がイエス様を歩ませたのです。

イエス様の言動を見聞いた人々は、イエス様に於て、神の大慈愛を見聞いた。イエス様その人に於て具体的に、「命」を見、「眞」にふれ、「愛」を感じ、「光明」を仰ぎ見たのである。即ち、限りなくあふれる生命のうながし、生命のうねり、生命の創造を確かに見たのであります。

人々はイエスにキリスト（救済の働き）を見たのであります。

イエスに於てそれを見聞いた者にとっては、もはや、イエス様が海の上を歩こうが、海辺を

歩こうが、はたまたたとえ空を歩こうが、それら一切は問題ではない。歩いたそのこと自体は、どうでもよいのである。そんなつまらぬことに執われてはいない。

イエス様が確かに顕す事実それ自体が人々をして、イエス様を歩ませずにはおかなかったし、事実歩んだのであります。

果たして、わたしは、わたし自身を、人々をして海の上を歩ませるほどに生きているだろうか。

18

「私が命のパンである。

私に來る者は決して飢えることがなく、

私を信じる者は決してかわくことがない。」

(ヨハネ福音書 6章35節)

イエス様は、「私は命のパンである」(48節)と申されただけでなく、更に一步すすめて、

「わたしは命である」(11・25、14・6)と申されます。

では、ここでイエス様が申される「命」とは何か。

どうやら、わたしたちが日常用いている「命」とはちがうようです。



わたしたちは、何ことに於ても、生きて、動いている場合そのものに「命」があり、そのものが動かず、生きていない場合は「命」が無いと言い、そのように判断してしまいます。つまり、一方を生物、一方を無生物というのです。

しかし、イエス様は以上のような生物学的な「命」を「命」と申されてはいません。

ところが、この生物学的な「命」を聖書が語る「命」と混同してしまうところから「永遠の命」を「いつまでも死なない命」と考えたり、「復活すること」を「生物学的な命をもって生まれて来る」ことだと考える愚を大真面目で信ずることになる。

聖書をよくよく読んでみると、イエス様が語られる「命」とは、不生・不滅・不増の不滅、さらに全てに於て見られ、どこにもあり、しかも、すべてのものは、その命のいと・なみ・そのもの・あらわれそのものであることがわかります。

しかし、わたしたちはその「命」をそれと見ず、先に申しましたように、生物学的生命に「命」を限定してしまいます。

イエス様は、その「命」を「命」として語り、行じ、示されたのです。

この「命」は、すでに及んでいる故に、「恵み」であり、不生・不滅・不増・不減である故に「光り」であり、「永遠」であり、「平安」であり、「道」であり、「復活」であります。

「私は道であり、真理であり、よみがえりである」と申されることがよく理解できます。

イエスに於て、その「命」を体得する時、人は生死を離れるのです。

19

「私の肉を食べ、私の血を飲む者は私におり、

私もまたその人におる。」

(ヨハネ福音書 6章56節)

なんの心得もなく、表記のイエス様のお言葉を聞く者には、この言葉はおどろき以外の何も  
でもありません。

しかし、このイエス様の言葉が、一体全体どこから発せられ、何を示しているのかというこ  
とが領解されるならば、この言葉の内容の重さと真実におどろき、さらに深い反省に導かれる  
でしょう。

イエス様は「私の肉・私の血」と申されたからとて決して「肉」そのもの、「血」そのもの  
を直接語っているわけではありません。

当時も今も、イエス様の言葉や行いを、直接そのものの指示語として受け取り理解したばか  
りに、どれほどイエス様は誤解され、その結果世にも不思議で馬鹿気た祭儀や礼典が、しかも  
真剣な顔つきでなされていることか、彼らは、ついぞ、その言葉や行いの語る真実を全く体得

することなく、「やすし、やすし」「めぐみ、めぐみ」と無意味に口にしつつ、それらを空しく行っているのです。

では、イエス様が、真実体得してほしいと願われた、その言葉の意味するところは何なのでありましょうか。

一口で申しますならば「全人格的・全存在的体得」ということであります。

「肉」だけではイエス様が語られる神様のお恵みの世界は得られない。「肉」とは一切の主観であり、体験、知識ということです。

さらに「血」だけでもイエス様のお示しなるお恵みの世界は、空論になるのです。「血」とは「命」です。(創、9・4)

つまり、イエス様が人々に願われたことは、人間存在の根底に、現としてある神の絶対的お恵みの世界を、頭だけでもなく、心だけでもなく、日常的生の只中でそれを全人的、全存在的に体得領解せよとされたのであります。

「自分から出たことを語る者は、自分の栄光を求めるが、自分をつかわされた方の栄光を求める者は真実であって、その人の内には偽りが無い。」

(ヨハネ福音書 7章18節)

神の栄光というものが、特別に私たちの日常の外に起こったり、あったりするものと思ってはなりません。

神の栄光は、私たちの眼前にあり、足下に充ち充ちているのであります。

イエス様は、いつも神の栄光を見ておられたし、栄光の中にあられたし、栄光自身を生きられたのです。

「空の鳥を見よ」「野の花を見よ」「己れの命を見よ」……とイエス様が申される時、それは私たち自身が神の栄光につつまれ、私たちが自身が神の栄光そのものであることを示しておられるのであります。

「もろもろの天は神の栄光をあらわし、大空はみ手ののわざを示す。この日は言葉をかの日につたえ、この夜は知識をか、の夜に告げる。話すことなく、語ることなく、その声も聞こえないのに、そのひびきは全地にあまねく、その言語は世界の果てにまで及ぶ」(詩へん19編)

なんとありがたきことでしょう。それなのに、私たちはこの神の栄光、神の命のうねり、神のいのちの創造、神のお恵みが見えず、見ようとしなない。

常に己れを現前に出し、己れを中心にすえ、すべてを見、すべてを考え、すべてを行為する。そして、己れの栄光を誇って止むことがない。この己れの傲慢（ごうまん）は、神の栄光をも己れで生み出そうとし、己れで現わそうとする。

「神の栄光を現わす」とは、己れが現わすのではない。すでに、現わされている神の栄光を、それ自身として栄光であるが故に、己れの現そうとする思い、はからい、信仰を全くすること、否、神の栄光の故にすてせしめられることである。そのとき、神の栄光はおのずとそれ自身現成し、現成していることがわかるのであります。今あなたは足下に神の栄光が見えるだろうか。

「私の教は私自身の教ではなく、私をつかわされた方の教である。

神のみこころを行おうと思ふ者であれば、

誰でも、私の語っているこの教えが

神からのものか、それとも、わたし自身から出たものか、

わかるであろう。」

(ヨハネ福音書 7章16・17節)

右のイエス様のお言葉は、イエス様の心にそくして領解していないと、正しく聞くことは出来ません。

ここで語られる言葉を解く中心的な言葉は何か。それは「わたしをつかわされた方の教え」の内容を、明確に知り、かつ見ているということとす。

では、その内容とは何か。端的に言うなら、それは、**「花が咲いている」**ということであり、**「鳥が空をとんでいる」**ということ、または、**「私が生きている」**ということであり、**「私が死ぬ」**ということとあります。

花が咲くのは、**「自ずから然る**のであって、**全く人のはからい**ではなく、**人のはからい**を超えて然るのであります。また、**花は自ら**そうしているのではなく、**自ずから然る**ものを、素直に

自<sup>おの</sup>ずからそうしからめてゐるにすぎない。これが神の眞実なのであり、教えそのものです。

イエス様は、それ故に、その神の眞実を解釈したり、説明したりしたのではなく、その事實を事實として語り示し生きられたのであります。つまり、あるものがあると申され、あるべきものをあらしめられたのであり、さらに白い色を白いと申されただけであります。

具体的に申せば、人は相互に愛さねばならぬ、とは、倫理や道徳や哲学や宗教の教えではない。これはそれら以前にあるものがありようを言ったまでのことでありませう。つまり、人の観念でとりあげる以前にあつたものであり、従つて、これは、あつたものをあらしめたただけなのであります。

イエス様の偉大さは、イエス様自身一言半句語ることなく、すでにある神の事實を事實として語られ、ただ生きられたところにあると申せませう。

「あなたがたの中で罪のない者が、  
まずこの女に石を投げつけるがよい。」

(ヨハネ福音書 8章7節)

イエス様がここでお語りになることは道徳や倫理ではない。

一般にキリスト教は、「お前も自分自身の心の中を見よ、そうすれば他人をさばける。自分でないことがわかるはずだ」と言う。

果たして、イエス様も、右の論法をもち出して語っていらっしゃるのだろうか。

もし、これを良心をもち出して、倫理や道徳の次元で語られたものと理解するならば、その人はイエス様の思いの、ほんの入口に立ったにすぎない。

一体全体、表記のイエス様の言葉が、どこから出て来て、何を人々に示し、教え、導こうとしているのか、よくよく思いめぐらすことが必要であります。

イエス様は倫理や道徳でなく、人間存在の根源について語っていられるのです。

人がもし、真に存在の根源に立ち、そこから、存在のすべてを見るならば、幾千万あると思ひ、信じ、たしかにそのように確実に見えていたそれらが、実は幾千万ではなく、只の一つであることに目覚め気付くにちがいありません。



そこでは、男も女もない。子どもも大人もない。白も黒も赤もない。罪も義もない、善も悪もない。いな、植物も動物もない。天も地もない。生も死もない。みな「一」なのだ。あるのは「愛」だけであります。

しかし、ほとんどの人々は、その現実を全く知らず、見ず、心にうかべようとしめない。それ故に、白だ黒だと言ひ、男だ女だと分ける。罪だ義だと叫び、生だ死だとうろたえる。動物と植物とを分け、人間をそれらの上位にすえる。

それらの人々にイエス様は申されます。「罪のない者がまずこの女に石を投げつけるがよい」と。

イエス様は、この言葉によって聞く人々を、男も女もない世界、罪も義もない世界に開眼せしめようとされているのであります。

耳ある者は、聞くがよい。

「私は世の光である。」

私に従って来る者は、やみのうちを歩くことがなく、

命の光をもつであらう。」

(ヨハネ福音書 8章12節)

イエス様は時々、「わたしは○○である」と申される。例えば「私は道であり、真理であり、命である」(ヨハネ14・6)などはその代表的な言葉であります。

しかし、この様に語られるイエス様の言葉は、ほとんど理解されず、むしろ多くの誤解を生み、あげくの果てには、そのような言葉のゆえに、イエス様は、自分を神とする者として告発され十字架に処せられてしまわれた。

一体全体、イエス様の生死を分つほどのこの言葉は、何を語り示そうとしているのでしょうか。もしかすると、私達も真実この言葉を理解しているようでありながら、未だに本当に理解していないのではないかと思ひみることは、とても大切なことであります。

これらのイエス様の言葉を正しく領解するためのカギは、「わたしは……」と申されるその「わたし」をどのように領解するか、という一点にかかっているのであります。

イエス様の言葉を聞いた全ての人々は、自分の目の前にいる当のイエス様そのものを、イエ

ス様が、ご自身を示して「わたし」と申されたと思ひ込んだところに、根本的な誤りが生じたのです。

イエス様が申される「わたし」は、わたしをわたしらしめている「わたし」なのです。それは、あなたをあなたらしめている「わたし」なのです。全ての存在者を存在者らしめている、「わたし」なのです。

この「わたし」は過去・現在・未来にわたってある「わたし」であり、増えもせず、減りもせず、生まれもせず、滅びもしない光りであり、命であり、愛であり、眞実そのものなのであります。ですからイエス様は「『わたし』はこの世の者ではない」と申されるのです。(8。

23)

結局、イエス様はこの世に在りつつ、この世に自分の生の根拠をもたず自分の根拠を神におき、自ら根拠と一体となって、発語されているのであります。

「もし、わたしの言葉のうちにとどまっておるなら、

あなたがたは、ほんとうにわたしの弟子なのである。」

(ヨハネ福音書 8章31節)

イエス様が申される「わたし」は、肉である自分自身を指して「わたし」と言われているのではありません。

鈴木大拙という人がいました。ある時、世界の哲学者達の集会で講演をしたおり、次のようなことを申された。

「聖書には『はじめに神は天地を創造された』と書かれてあるが、一体全体、だれがそれを見ていたのか」

一同は静まりかえって、大拙の次の言葉を待っていると、「わたしが見ていたのです。」と云ってのけた。これを聞く者一同哑然としていた、ということです。ときにこの話、ハワイの大学でのことだそうです。

これは、私のことで恐縮ですが、去る日、静かな部屋で読書をしていると、そばに暖を取るために燃やしていた石油ストーブの火が、急にブツブツと音をたて出した。わたしは、その音を耳にしている、これは幾億年か以前の石油の歎喜の声に聞こえた。そして、それはまぎれも

なく、わたしの声でもあったのです。

それ故に、イエス様は申されます。

「よくよくあなた方に言っておく。アブラハムの生れる前から、わたしはいるのである」と。結局「わたし」とは「永遠の命」つまり、滅りもせず、増えもせず、生れもせず、滅びもしない命そのもの、すべてのものをそれとして生み育て、やがて、またその内へ納めてしまう、「永遠の命」即ちキリストそのもののことでもあります。

その「わたし」に、わたしが生き、生かされていることへの開眼こそ、命への開眼なのであります。

これ即ち、「わたしの言葉のうちに止まる」ことであり、「わたし」の言葉が、あなた方のうちに根をおろす（8・13）ことなのであります。

本当の自由はここにのみある。（8・32）はたして、「わたし」が見えるか！

「弟子達はイエスに尋ねて言った。先生、この人が生まれつき盲人なのは、だれが罪を犯したためですか。本人ですか、それともその両親ですか。」

(ヨハネ福音書 9章2節)

人は言う。それは先祖の犯した罪の結果だ。先祖のたたりだ。お前の過去の罪の結果だ。と。

洋の東西を問わず、時代の如何にかかわらず、理由がわからぬとおもわれる不幸について人々は、先のごとく同じことを言い、そこに原因と理由を求め帰して来た。それらを一口に言えば、因果応報の説となる。

この、因果応報説でもって、不幸のどん底におちた義人ヨブに不幸の原因を説き、悔改めを迫ったのが、ほかでもない旧約聖書ヨブ記にあるヨブの友三人である。

人の罪人性は、はじめの人アダムとイヴの犯した罪の結果によると説く原罪説も、結局はこの因果応報説の一つにほかならない。

人がどうにもならない不幸についてイエス様は何と申されたか。次のように申される。

「本人が罪を犯したのでもなく、また、その両親が犯したのものでもない。ただ神のみわざが、彼の上にあらわれるためである。」(9・3)と。

イエス様にとっては、両親の罪、本人の罪、それらを論ずることに全く関心がない。それより、今、目の前にいる当の本人にかかわること、愛の手をさしのべることに全ての関心を注ぎ給うのである。そしてついに、当の本人が、不幸だと思いついてることが、その実、不幸でも悲しみでもなく、さらに喜びでも幸福でもなく、それはそれとして、神による生命の輝き、現れ、そのものなのであることを見出すに至るまで、かかわりつけようとするのであります。

「あの方が罪人であるかどうか、わたしは知りません。

ただ一つのことだけを知っています。

わたしは盲人であったが、今は見えるということですよ。」（ヨハネ福音書 9章2節）

世の中には、話されていて合わない人というものがいる。そのかたちはさまざまあるだろうが、ここに一つの形が語られています。

一人は、定義とか命令とかがないと行動出来ない人。今一人は定義や命令などなくても事実  
に則して行動する人です。

パリサイ人は定義や命令がないと行動出来ない人達であった。彼らは常に神の言葉である律  
法の指示に従って行動し、判断した。彼らは、事実がどうであれ、律法に照らし合わせて判断  
したのです。

このようなパリサイ人からはイエス様は罪人に見えた。なぜなら、イエス様は、律法の命令  
や定義の言葉より事実を素直に見て、その事実  
に則して行動されたからです。

表記の言葉を語っているイエス様に盲目を癒された盲人も、事実を素直に見る人であった。  
彼は言う。「あの方が罪人であるかどうかは、わたしは知りません。」そしてつづけて「ただ一



つのことだけ知っています。わたしは盲人であったが、今は見えるということです。」と。

彼は、「今は見える」という事実のうえに立ち、また、その事実を則して事実を語るのです。さらに、彼は語ります。「もしあの人が神から来た人でなかったら、何一つ出来なかったはずですよ。」と。

この目を開かせられた人は、神についての定義から神を語っているのではなく、自分の体験的な事実にもとずいてイエス様を語り、神を語ろうとしているのです。

事実を言葉でつつみ、色づけしてしまうことを観念化と言うなら、わたしたちも、先ず、言葉でなく神の事実をイエス様に於て素直に見るものでなければ、ついで神を言葉でとらえようとする観念論者になりかねません。あなたがつかんでいる事実を見せてみよ。

「わたしがこの世にきたのは、さばくためである。

すなわち、見えない人たちが見えるようになり、

見える人たちが見えないようになるためである。」

(ヨハネ福音書 9章39節)

さばくとは罰することではありません。

さばくとは、何が確かなことであるかということを決定的なことであります。

人はそれぞれ、自分は「見えている」と思い込んでいます。そして、見えているものも確かなものだと思っています。

しかし、「見えている」と思い込んでいるそのことが、まさに、思い込みにかすぎず、見えているものの確かさが、その実、決して確かなものではないのだ、ということに全く気づくことなく、確かなものが見え、かつ見て生きていると確信している。そのような自分に生きている。パリサイ人とはまさに、このような人々の代表であったのです。だから「見える」というところにあなたの罪がある。」とイエス様は申されます。勿論、このような人々は、当時も今もみちみちています。

世の人々は、現実がその実、現実でなく、自分がその実、自分でなく、神がその実、神では

ないので、ということについては、全く見えていないのであります。

現実も、自分も、神も、その実それは、わたしの思い込みだということに少しも開眼していません。だから、現実にこだわり、自分にこだわり、神にこだわるのです。

パリサイ人は律法にこだわりつけ、さしずめ今日のキリスト教会は聖書の言葉にこだわりつけます。ですから、いつまでたっても「宗教」でしかあり得ないのでしょう。

表記の「見えない人」とは、「求道の人」のことで、見えないことを知って求めている人のことです。

「見えている」という人には求道心はありません。求道心とは問う心です。問う心とは疑の心であり、疑の心は否定の心であり、否定の心こそ、こだわりからの解放へとその人を導き、ついに、イエス様が立つあかろみの世界、あかろみの現実を覚するに至るのであります。

イエス様は、明の現実を示すことによって、明と暗を決定し、人として真の自覚へと開眼せしめようとされたのであります。

「わたしは良い羊飼であって、

わたしの羊はまた、わたしを知っている。」

(ヨハネ福音書 10章14節)

人の生きる姿を迷える羊に例えて見られたのはイエス様です。

迷える羊のような生き方をしている人々に、生きることのありがたさを与えるために、わたしは来たのだとイエス様は申されます。(10・14)

良い導き手とは導くべき相手をよく知っており、さらに共に歩んで行くものであります。

しかし、ただそれだけでは、実は何事も起らず、何も生まれては来ません。

大切な一事があります。それは、こちらがわに於て、よい導き手であるということに開眼されていなければならぬ、ということなのです。

それゆえにイエス様は申されます。「聖なるものを犬にやるな。また真珠を豚に投げてやるな。恐らく彼らはそれらを足で踏みつけ、向きなおってあなたがたにかみついでくるであろう」

と。(マタイ7・6)

まことをまことと見分け、見通す眼力がある人のみ、まことに感応できるのであります。

まことに感応出来る心はまことごころのみです。まことごころとは素直なごころ、深い意味

での自然のころなのであります。

「心の清い人たちは、さいわいである。その人は神を見るであろう。」とイエス様が申されるゆえんであります。(マタイ5・8)

心が清くなるとき、人は自分が真実の命に生きているものであることが見えてくる。増えもせず、減りもせず、生じもせず、滅びもしない命に生きている真実の自分が見えてくるのです。

生だ死だ、不幸だ幸福だ、損だ得だ……と言ひ、感じ、泣いたり笑ったりしているその底に、おもいもよらぬ命の輝き、明るい現実の世界、そのような自分があるのであります。

イエス様は、その「命を得させ、ゆたかに得させるためにわたしは来た」と申されます。

(ヨハネ10・10)

この命の共有、共感こそイエス様と共に生きることでもあります。

「わたしは、父による多くの良いわざを行い、

あなたがたに示した。その中のどのわざのために、

わたしを石で打ち殺そうとするのか。」

(ヨハネ福音書 10章32節)

イエス様が、語ったり、行ったりなされるわざをみるとき、どのような人も、そのわざに反論することはできません。

つまり、イエス様のわざは、わたしたちがもっている主義・主張・議論を越え、つきぬけて、だれもが「その通りです」と申さねばならない道理そのものを語り行っているものであります。

「敵を愛しなさい」「兄弟だけにあいさつをしたからとてなんのすぐれた事をしているのだろうか」「人をさばくな」

これらのイエス様の言葉や行いは、人々の耳や心に何のささわりもなく入り、「その通りです」とうなずかせます。

イエス様の言行は、ただの論理や道徳としての命令でも束縛でもありません。また、人が社会生活の中でつくりあげた人間の在りようとしての「良心」でもありません。